

国木田独歩「春の鳥」論

辻 橋 三 郎

(一)

『春の鳥』は、ほとんど批判を絶する傑作である。これは、独歩の中でも、じゅうぶんに書きつくされた小説である。独歩には甘さがある。感傷がある。甘さや感傷は、一步をあやまると文学をだいなしにしてしまう。しかし、それが徹底すれば、『春の鳥』のように大へんな力をもつ文学が生れるのである。」（『国木田独歩論』明治大学全集66『国木田独歩集』／＼築摩書房、昭四九・八／＼所収、傍点中島）

この中島健蔵文から引用したパラグラフは、「春の鳥」の魅力を、端的に物語って余さない。しかし、この作品は、発表当時（『女学世界』明三七・三、第二作品集『独歩集』／＼佐久良書房、明三八・七／＼所収）も、その後、独歩の文名のあがった時点においても、特に注目された作品ではなかった。それが、ヨーロッパ文学思潮の形式に則って、明治文学が整理編成されていくなかで、漸次、その真価を評価されるに至ったのであった。そして、やがて、その健全性の故に、「武蔵野」、（はじめ、「今の武蔵野」『国民之友』明三一・一〜二）、「忘れ得ぬ人々」『国民之友』明三一・四）などとともに、教科書などにも採用され始め、一般の人びとの喧伝するところとなったのであった。

独歩自身にとって自信作であったことは、自作解説である「予が作品と事実」(『文章世界』明四〇・九)、病床の口述筆記『病牀録』(新潮社、明四一・七)などにも、その記事が見出されるところから推測されるところである。

「此一編の主人公、白痴の少年は余が豊後佐伯町に在りし時親しく接近した実在人物で、此少年の身の上話は皆な事実である。しかし此少年が城山で悲惨な最後を遂げた事は余の想である。余は此少年を非常に氣の毒に思ひ、自分から進んで其教育に従事して見た事もある。数の觀念が全く欠けて居るので如何にしても此欠陥の幾分なりとも補ひくれんと種々の手段を採つた事もある。けれども此等は、悉く徒勞に歸した。そこで余は当時白痴者に就き、深い同情を持ち、常にこれを念頭に置いて居た。此少年の事を思つて、人間と鳥獸の差別、生物と宇宙の關係など、随分城山の上で空想に耽つたものである。そして此一編が七八年の後に出来たのである。」(『予が作品と事実』)(傍点辻橋)

『病牀録』も、大体、同一のことが記録されているので、引用しない。この一文は、「春の鳥」の成立の経緯とモチーフとを率直に表明しているといつてよからう。特に傍点部分のモチーフは、この作品を解く鍵を秘めているといつていい。

ここで、主人公「白痴の少年」のモデルについての、郷土研究家の研究を紹介しておきたい。少年の実名は山中泰雄、佐伯在住中、独歩の下宿した坂本永年の妹シゲの第三子であった。父正巳は、泰雄三歳の時に死亡。泰雄一二歳の時、母シゲ、姉トリと一緒に、坂本家に身をよせた。泰雄は、後年、大分県北海部郡日代村大字日光の福勝寺の寺男となり、村人から「泰やん」の愛称で親しまれたが、昭和三年四月一七日、六七歳で死亡したという。当時の彼は、一般人と変らぬ常識の持主になっていたが、計算だけは、やはり不得意だったとのことである。さらに、泰雄の父、正巳は大酒家ではなく、また、母、姉ともに温和な普通の女性であったとも報告されている(小野茂樹『若き日の国木田独歩——佐伯時代の研究』アポロン社、昭三四・一二)。それでは、何故、作品「春の鳥」のなかで、母姉ともに、主人公同様、白痴としてデフォルメされているのか、という疑問が生まれるが、このことについては、後述する

ことにしたい。ともあれ、独歩は、この自信作において、何を読者に訴えようと思っていたのであろうか、その解明を小論の主意としたい。

(二)

最近、国木田独歩研究を、大きく推進させた著書が二冊ある。一つは、角川書店発行の、近代日本文学大系中の、『国木田独歩集』における、山田博光氏の注釈であり、一つは、北野昭彦氏の『国木田独歩の文学』（桜楓社、昭四九・九）である。特に、北野氏の著書の中の、『白痴讚美』のロマンチズムと『春の鳥』という論文は、卓抜の論であり、またその故に、筆者には問題点が見出されてくるのである。

氏は、この論文の冒頭で、「結論から先にいうと」と前置きして、『春の鳥』を『白痴讚美』の文学だという観方には否定的なのである」と明言している。そして、『春の鳥』を『白痴讚美』のロマンティズムとして、浪漫主義文学の中に位置づけたのは片岡良一氏であるとして、氏の著書（『日本浪漫主義文学研究』法政大学出版局、昭三二・二）から、長文の引用を行っているのである。筆者も、以下、その一部を掲げ小論の展開に資したい。

「鳥のまねをして空を飛ばうと思つて高い崖から飛び落ちて死んでしまった白痴の死に、神の道に通ずるもの（尊さ）を感じようとするのが『春の鳥』には書かれているのである。そこに浪漫主義文学の一つの頂点がある（後略）」。

やや目のあらい筆法とはいえるが、筆者は「春の鳥」の真髓を直言したものとして評価したい。したがって、筆者の小論は、北野説との異同がその要旨となることにならう。

その前に、長谷川泉氏（『近代名作鑑賞』至文堂、昭三三・六）の「春の鳥」評の一節を顧みてみたい。

「『春の鳥』は、佐伯における独歩のワーズワース傾倒の記念碑的作品である。」

佐伯時代の独歩のワーズワース景仰は、佐伯時代を素材とした「小春」(『中学世界』明三三・一二)の詳細に物語っているところである。そのなかから、そのことを直接的に告白していると思われる部分を掲げておく。

「ただ一言する、『自分が真にワーズワースを読んだのは佐伯に居る時で、自分が尤も深く自然に動かされたのは佐伯に於てワーズワースを読んだ時である』といふ事を。」

つまり、そのみのりが「春の鳥」であった訳である。しかも、そのみのりのなかに、独歩は、その創作に際して触媒の役割を果たしたワーズワース詩「童なりけり」(There was a Boy 田部重治／岩波文庫)は一人の少年と訳している)の大意を挿入するとともに、「春の鳥」の作意にまで言及しているのである。

「この詩よりも六歳のこと、は更に意味あるやうに感じました。」(傍点辻橋)

この詩は、数多いワーズワース詩の中でも、独歩の愛誦詩であつたらしく、彼のワーズワースの詩注解書『自然の心』(東京尚栄社、明三五・六、全集八卷所収)にも、全文が収載され、解説が施されているのである。そのなかに「一人の童児が自然の懷より出で間もなく又自然の懷に返り去りたる哀痛の中に幽趣あり、幽趣の中に光明あるワーズワース独特の詩題あり。」

という言葉がある。独歩は、「童なりけり」のなかに、「哀痛」↓「幽趣」(『神秘』)↓「光明」という構造を掘りおこし、読みとっていたのである。この構造を、「春の鳥」に応用していることはまちがいない。しかも、「この詩よりも六歳のこと、は更に意味あるやうに語り手の私が「感じ」ているということは、「童ありけり」における「光明」が、「春の鳥」においては、より一層複雑なものであるということを物語っていると考えてよからう。とすると、「六歳」の生死の「意味」より複雑な「光明」の内容を説明することが、「春の鳥」の本質を把握することになるかと思う。そのためには、先ず、「春の鳥」という題名から考察を進めなくてはならない。

(三)

ワーズワースの多くの詩を通読してみると、鳥の姿態、鳴き声が、素材としてしきりにとりあげられている。したがって、佐伯時代に材をとったこの記念碑的作品に「春の鳥」というタイトルをつけたことは、まことにふさわしい命名法であったといえよう。

さて、ワーズワースには、「郭公に」(*To the Cuckoo*)という名詩がある。『自然の心』には収録されていないが、ワーズワースアンたる独歩が読み落していることはない筈である。そして、その第四節、第八節に、見逃し難い詩句が見出されるのである。独歩は原文で読んでいたことと思われるので、原文を先に掲げ、それに田部訳を添えておく。

Thrice welcome, darling of the Spring!

Even yet thou art to me

no bird, but an invisible thing,

A voice, a mystery;

O blessed Bird! the earth we pace

Again appears to be

An unsubstantial, faery place;

That is fit hone for Thee!

よくぞ来し、春の寵児よ！

今もなお汝はわれには、

鳥ならず、ただ見えざるもの、

一つの声、一つの神秘。

おゝ、さち多き鳥よ、

われらが歩むこの土地は、

汝にふさわしき住家^{すまみか}なる。

まぼろし
幻の国と再び思われる。

このなかで、四節の“darling of the Spring”と、八節の“blessed Bird”とは、同一の鳥（郭公）をさしているものと思われる。とすると、これらが、独歩の内部で合成されて “blessed Bird of the Spring”→“the blessed Spring Bird”となつてしまつたと推測しても差支えないのではないかと考えられてくるのである。この blessed という語は、英文聖書にも多用されている語ではあるし、単純な「幸福な、しあわせな」という意味以上の、「神の恩寵に恵まれることによつて幸福な」という意味がこめられている語と読んでもいいように思われてならないのである（語源的にも、そういう理解が可能であることを、英文学者金城盛紀氏から御教示を受けた）。というよりも、独歩がそう理解していたのではないかと思惟するのである。したがって、「春の鳥」というタイトルが、季語風のものでないことはいうまでもなく、また、単純なロマンティズムを背負つた語という限界をも越えて、救済された浄福のなかにあるもの、という意味の象徴として着想され、造語され、使用されているように解釈されるのである。

このような推論を、筆者が敢えて行ったのは、この作品の最後の一行にかかわっているのである。湯地孝氏は、「この一羽の鳥を六蔵の母親が何と見たでしょう」という結末のセンテンスを「言はでもの贅言」(『明治大正文学の諸傾向』昭一〇・八、積文館)としておられる。ところが、筆者には、この一行こそ、この作品の死活を決する一行に思われてならないのだ。というのは、この一行の意味するところは、この一羽の鳥を救済された六蔵の化身と見て、その昇天を、母親は見送っていたということであり、この作品においての必要不可欠の、最後のきめ手であったと思考されるからである。筆者に以上の解釈を成立させた手がかりは、独歩が、佐伯時代、ワーズワースとともに、「竹取物語」をも併読しており、それにも感動していた形跡があることによるのである。

「昨日午前竹取物語を読む、〔以下五字抹消、一昨日夜は〕又近頃ウォーズワース逍^イ遊^イを読みつゝあるなり。(中略)此物語の神韻縹渺として詩想の高きに感ず、かくや姫の將に月の宮の帰^イらんとて、嘆き悲しみ、養ひ翁の別れ惜みてもだへ苦む情様こま(や脱力)かにして言外の妙味実^イに吾をして幾度か巻を掩ふて泣かしめぬ。」(『欺かざるの記』明二六・一一・二六)

「竹取物語のかぐや姫を思ふ時は身も魂も飛んで天辺に月に向ふてあくがるゝ也。」(『欺かざるの記』明二六・一一・三〇)

また、佐伯時代の「竹取物語」への感動体験は、親友田村三治宛への書簡(明二六・一一・二七⁽²⁾)にもうかがわれるところであった。

こうして、独歩の「竹取物語」についてのコメントを読んできると、最後の一行は、「六蔵の母親」が、「一羽の鳥」と化した六蔵が、月の世界ならぬ天国を志向していたという確信に生きていた姿を定着させたものと読んでも、それは、あなたがち強辯とはいいい得ないと思われるのであるがどうか。この一羽の鳥こそ“The blessed Spring Bird”——「春の鳥」であり、それは、六蔵のよみがえった靈魂であり、復活の生命そのものであったといえるので

はないかと推考するのである。しかし、これでは、結論を早く出しすぎていることになる。このことについては、後でさらに叙述を試みるつもりなので、ここでの縷述をさし控えたい。

このようにして、「春の鳥」という作品は、題名の段階において、早くも、作品の主題を象徴的に含蓄しているように、筆者には思われてならないのである。

(四)

この作品の主人公、白痴の六蔵少年は、先ず、人びとの恐怖を誘い出す人物として登場させられる。

場所は「或る地方」の「城山」。時は「或る日曜の午後」。「むつまじげに話しながら楽しげに歌ひながら」「枯枝を拾って居」た三人の小娘が、「キヤツと」声をあげ、「枯木を背負ったままアタフタと逃げ出して」いった。そこへ、「紺の筒袖を着て白木綿の兵児帯へこおびをしめて居る様子は農家の児ひやくしやうでも町家の児ちやうかでもなさう」な、「十一か十二歳」と思はれる男の児こが現われてきたのである。そして、「私」を見て「ニヤリと笑ひ、」やがて、「イキなり石垣に手をかけて猿のやうに登りはじめ」て、たちまちのうちに、「私の傍そばに突立ち、また「ニヤニヤと笑つ」たのである。

以上、第一章における、少年の出自、性格、心性についての暗示的表現は、第二章において、詳しく説明されていく。即ち、昔の家老職の一族で、亡父は大酒家、母も姉も、そして、当の少年も、白痴だというのである。

以上の略述でも推測されるように、独歩は、この母子の異様さを、彼らの特殊な笑いによって端的に表現させるといふ技法をとっている。

「やがてニヤリと笑ひました。」

「そしてニヤ／＼笑つて居ります。」(以上第一章)

「児童こどもは私の顔を見てニヤリ笑つたまま草箒で落葉を掃き、言葉を出しませんでした。」

「口を少し開けて人のよささうな、たわいのない笑を何時も眼尻と口元に現はして居るのが此人（母のこと、辻橋注）の癖でした。」（第二章）

「無理にきくと初は例の怪しい気な笑方をして居ますが後には泣き出しさうになるのです。」

「しかし直ぐと笑って居る様は打たれたことも全然忘れて終つたらしく、これを見て私は猶更白痴の痛ましいことを感じました。」（以上第三章）（傍点すべて辻橋、但し、「たわい」のみは、独歩も傍点をふっている）

この笑いは、決して気持のいい笑いでない。薄気味の悪いそれといえ、そういうものである。このように、恐怖を誘い出す、あるいは、薄気味悪い笑いをする母子が、この作品の、主人公、副主人公という訳である。そして、この母子の白痴という精神的欠陥が、遺伝に基づくものであるということが、第二章に詳しく記されているのである。これが、モデルの事実をデフォルメしたものであることは、先述した。しかし、六歳母子の白痴が遺伝によるという条件設定は、この作品の主題の展開に必要不可欠のものには思われない。これは、笹淵友一氏のいわれるように、ゾラやダーウィンの思想に接触していたという（『文学界』とその時代下）／＼明治書院、昭和三五・三〇、独歩の精神状況が露頭をあらわしたものと読みとってよからう。このことについても、後でふれることにしたい。

さて、この少年は、第一章の終わり、鳥を見て、「突然」「ワア／＼と啞のやうな声を出して駆出」した。この描写は、六歳が「鳥が好で、鳥さへ見れば眼の色を変て騒ぐ」という性向を暗示していた。しかも、この少年にとって、すべての鳥は「鳥」であり、その彼のいわゆる「鳥」が「飛立つてゆく」姿、「空を自由に飛ぶ」状態が不思議でならなかったのである。そして遂に、語り手の「私」が「鳥のやうに空を翔け廻る積りで石垣の角から身を躍らしたものと推定されるやうな死にざまを、石垣の下にさらしてしまったのである。

さて、語り手の「私」を、「人間と鳥獣との差別」「人間と動物との相違」の思索に導いた白痴母子を形容するに際して、独歩は、「あはれ」、あるいは、これに類似した言葉を、しばしば使用しているのである。

「六蔵の姉はおしげと呼び其時十七歳、私の見る処ではこれも亦た白痴と言つてよいほど哀れな女でした。」(第二章) (モデルの母の実名を、作品では姉の名前にしている——辻橋注)

「主人の語る処によると此哀れなきようだいの父親といふは(下略)」(第二章)

「不具の中にもこれほど哀れなものはないと思ひました。」(第二章)

「おしげは兎も角、六蔵の方は児童だけに無邪気なところが有りますが、私は一倍哀れに感じ、(下略)」(第二章)

「母親も亦た白痴に近いだけ、私は益々憐れを催ふしました。」(第三章)

「私もこの憐れな児の為に随分骨を折つて見ましたが眼に見えるほどの効能は少しも有りませんでした。」(第四章)

「人類と他の動物との相違。人類と自然との関係。生命と死などいふ、問題が年若い私の心に深く／＼哀れを起しました。」(第四章) (傍点すべて辻橋)

この「あはれ」という形容語を、単純な辞書的意味にとつていいものかどうか、筆者は躊躇するのである。手元にある辞書を見ると次のような解説が目に入ってきた。「①「哀れ・憐れ」がかわいそうなさま。ふびん。また、同情をひくこと。②「哀れ」みじめなさま。③「哀れ」人の心を強く打つような感動。しみじみした情趣。悲しみ。」(『岩波 国語辞典第二版』)

たしかに、独歩が、白痴母子を形容する語として使用した「あはれ」に、これらの意味もこめられていることは、

多言を要すまい。また、他の独歩の作品における用語例に、そのような意味のものが多くのも事実である。しかし、「春の鳥」の場合、前述した「春の鳥」のタイトル究明の際に、明らかにしたところと思い合わせてみると、単にそれだけにとどまっているように、どうしても思われないのである。

というのは、この「あはれ」な白痴、六歳少年が、死亡したことが、母には、次のように信じられているのである。「お前は死んだほうが可いよ。死んだほうが幸福だよ……」

「ね、先生。六は死んだほうが幸福で御座いますよ、」

この言葉は、いわゆる心身障害の児童が夭折した時に、愛する肉親がひそかに発する言葉ともいわれよう。しかし、「春の鳥」のタイトルについて、筆者のような読み方をした時、六歳は、「白痴」としての「あはれ」さ故に、「幸福」になっている、救済されているという独歩の意向として読みとることも可能なのである。即ち、救拯につながる「あはれ」であるとするれば、それは、独歩精神史からみて、キリスト教的な意味と推定せざるを得ない。そこで、次の手続きとして、キリスト教辞典を調べてみよう。

『あわれみ』『他者の苦しみに心を動かされること。慈悲深い神の至高の特性である。それは人間を罪から救うキリストの行為に決定的にあらわれたもので、その意味では恵み、愛に等しい。この神の憐れみにもとづいて、人もまた憐れみ深くあることが求められる（マター一八・三三、ルカ一〇・三〇以下）。憐れみの行為は、それによって神の審きが決定される、最も重要な基準である（マタ二五・三一以下）。」（山谷省吾『新約聖書辞典』（清水弘文堂、昭四三・六）

要するに、キリスト教的な「あはれ」の意味は、神の愛に値する存在の属性、神の恵みに値する存在の属性、神の救済に値する存在の属性、という意味になるのである。したがって、「あはれ」をそのようなキリスト教的な意味と理解して考えてみると、神の救済に値する存在たる母が、同じく神の救済に値する存在たる六歳少年の化身たる鳥を、

「茫然と我をも忘れて見送」っている心境は、全き神の恩寵の中にあるわが子の幸福に見入っている、法悦、恍惚のそれといえるのである。

この母の心を、独歩自身、そして読者にも、確認し、確認させるためのものが、湯地氏に無用の「贅言」といわれた、最後の一行であった。

「この一羽の鳥を六蔵の母は何と見たでしょう。」

ここで、必然的に、母親の心の、心理分析が要請されているとみななければなるまい。即ち母の心は、永遠の淨福のなかにある、復活の生命に生きるわが子の姿に、祝福を送っていた、ということになるうと思う。

ここに、『自然の心』のなかの、「童なりけり」解説にある、「あはれ」の中に「幽趣」Ⅱ「神秘」を、「幽趣」の中に「光明」を読みとる読み方が生かされていたということになると思う。また、ここで、先に揚げた「死んでしまった白痴の死に、神の道に通ずるもの（尊さ）を感じようとする」ことが『春の鳥』に書かれている」という片岡言が納得されてもくるのである。

(六)

次に、「白痴ながらも少年はやはり自然の児」というフレーズ重視の見解について検討してみたい。

「空の色、日の光、古い城趾しろぞ、そして少年、まるで画です。少年は天使です。此時私の眼には六蔵が白痴とは如何しても見えませんでした。白痴と天使、何といふ哀れな対照でしやう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の児であるかと、つくづく感じました。」（第三章）

ここにかがわれる少年観から考えてみよう。「少年はやはり天使です。」「少年はやはり自然の児」などという表現には、ワーズワースの少年観(3)、その根底にあるキリスト教的少年観があることはまちがいない。先に紹介した独歩

のワーズワース注解『自然の心』に、独歩は次のように書いている。

「彼は自然と人生の交渉に於ける信仰をば如何なる基礎の上に置きしかといふに幼時の回想是れなり。彼は吾人が少年の時代に我知らず自然の讚美者たり、又自然の同化者たる事実を似て意味なき事と思はず、此事実の中に深き意味を発見して、これを信じたる也。」

即ち、ワーズワースは、少年時代こそ「自然の讚美者」、「自然の同化者」だといっているのである。換言すれば、独歩は、ワーズワースは、少年こそ、「自然の児」だ、理想の人間像だといっているのである。こうみてくると、本節冒頭に引用した「春の鳥」中の問題文は、ワーズワース少年観の敷き写しといっても過言にはならない程である。そうすると、「白痴と天使、何といふ哀れな対照でしやう。」「白痴ながらも少年はやはり自然の児」とある問題的表現は、ワーズワース的少年観と、これまで独歩が展開してきた、神の愛による白痴少年の救済、神の恩寵による、白痴少年の生命の復活という、キリスト教的思想との調和、統一を図るための、無意識的表現ではなからうかと、筆者には思われてくるのである。北野昭彦氏はこのことについて次のような見解を示している。

「六歳が『白痴であること』によって天使であり、自然の児」とはならず、『白痴も少年であること』によって天使であり、自然の児なのである』のも当然の帰結であつた。独歩の小説は、『少年讚美』にはなり得ても、はじめから『白痴讚美』にはなり得なかつたのである。」

この解説はワーズワース少年観のみによる結論とはいえても、独歩の作品「春の鳥」をトータルに把握したということにはならないのではなからうか。もっとも、こうした読み方は、笹淵友一氏も別の観点からとっておられるところである。即ち、第二章における、六歳の白痴が遺伝であるという説明の部分⁽⁴⁾を引用され、「禽獣は人類に劣るものであり、人類は万物の靈長であつて、人類を人類たらしめるものはその知能であるという」独歩の「思想」がここにある、そして、「これは自然尊重の浪漫精神とは反対の常識的、科学的開化主義といふべきもので」、「したがって「春

の鳥」は「自然憧憬と開化主義」という、「矛盾する」「二つの思想が無自覚のうちに混淆」されているといわれるのである。そして、そのあと、小論(六)の冒頭にあげた、第三章の問題文を引用されて、「独歩の意識によれば、白痴と天使、白痴と自然の児とは対立概念で、「その少年も少年であることによって天使であり、自然の児」だといっておられるのである。要するに、笹淵氏も独歩の「白痴」は「人類を人類たらしめる知能」の欠除不十分を示すもので、その故に、「少年」であることが、「天使」「自然の児」の最大必須条件だといわれるのである。

たしかに、独歩によって、白痴六蔵は、小論四で述べたように、人びとに「恐怖」を与える存在として登場し、母子ともども薄気味悪い笑みを浮べている「不具者」として、一般的普通人より劣弱な存在として描かれている。しかし、事実は、主人公のみが白痴的ではあっても、その父母、姉は、正常な精神状態の人びとであったという。にもかかわらず、独歩は、作品において、遺伝という、当時流行の学説を応用して、それぞれ、大酒家、白痴などというように、デフォルメしたのであった。このような、文学的作為は、遺伝というものが、主人公にとって如何ともし難い運命であったという、独歩好みの運命劇という印象を、「春の鳥」というこの作品にも与えるための作為ではなかったかと、筆者には思われてならないのである。

筆者には、キリスト教思想による六蔵救済説、ワーズワース少年天使説、それに、本人には抵抗の術のない遺伝による白痴の運命悲劇、そういう三つの思想の混在に調和と統一とを与えるための努力が、第四章の次の文章となったように思われてならないのである。

「死骸を葬った翌々日、私は独り天主台に登りました。そして六蔵のことを思ふと、いろ／＼と人生不思議の思に堪えなかったのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との関係。生命と死などいふ、問題が年若い私の心に深い／＼哀を起しました。」

しかし、独歩は、この一節では、自らの意図を十分に達成した表現としては満足し得なかったのではなかろうか。

それが、例の問題的な文章中の、「白痴と天使、何といふ哀れな対照」あるいは、「白痴ながらも少年はやはり自然の児」という、矛盾をふくんだ言葉となり、笹淵氏のいわれる「矛盾する二つの思想を無自覚のうちに混淆している」という評語を招いてしまったのではないかと考えるのである。そして、それが、後の研究者たちの評価論争の素材を提供してしまったと思うのである。ところが、一步翻って、文章効果という側面からみる時、その撞着をはらんだところが、自然と人生とのもつ神秘性、幽玄性という気分を、作品中に播曳させ得たともいえるのである。とすると、後の研究者をして右往左往させているこれらの文章は、文学作品としての芸術性結晶のためには、成功であったという評価が正しい読み方ということになってくるのである。小論劈頭にあげた、中島文中の「批判を絶する傑作」という絶讃の辞が生れた根拠はそのあたりにあったともいえそうに思われてくるのである。そして、そのような幽趣神秘という作品世界の気分情調を、一層、濃密化させたものが、作品の根底に潜流し続けている、ワーズワース的自然観と東洋的伝統的なそれとの渾然一体となった情緒であった。一例をあげよう。

「落葉を踏んで頂に達し例の天主台の下までゆくと、寂々として満山声なき中に、何者か優しい声で歌ふのが聞えます、見ると天主台の石垣の角に六蔵が馬乗に跨がつて、両足をふら／＼動かしながら、眼を遠く放つて俗歌を歌って居るのでした。」(第三章)

「石垣の上に立って見て居ると、春の鳥は自在に飛んで居ます。其一は六蔵ではありますまいか。よし六蔵でないにせよ。六蔵は其鳥とどれだけ異って居ましたらう。」(第四章)

そこは、城山の石垣という、かつて、悲喜哀歓の人間劇がこもこも繰返された舞台の廢墟である。それらはすべて、いま、永遠の時間の流れのなかで、大自然の一部に還元してしまっているのである。無数の死者の魂魄の悲泣を秘めた静謐は、おのずから、人びとの心を、痛いまでにひきしめる。そのような自然のなかで、六蔵少年は、まったく無心をもって、自在に歌い、かつ行動しているのである。それは、歴史Ⅱ過去の人間絵巻を嚥下呑噬した大自然のなか

の一因子、というよりも、大自然の呼吸そのものともいってよからう。

ともあれ、「春の鳥」は、このような背景情緒のなかに、先述した思想が交織された作品であった。それが、中鳥文にあげられているような「甘さ」と「感傷」とを醸成したのであった。

(七)

独歩文学においては、最後の一行、乃至部分が、作品の向背、主題の暗示を決する役割を果たすことが多かった。その最もよき先例が、「忘れ得ぬ人々」の結末であった。

「机の上には二年前秋山に示した原稿と同じの『忘れ得ぬ人々』が置いてあった。其最後に書き加へてあったのは『亀屋の主人』であった。」

『秋山』では無かった。」

これと、「春の鳥」の末尾とを比較して欲しい。煩を厭わず、もう一度、転記しておく。

「城山の森から一羽の鳥が翼をゆるやかに、二声三声鳴きながら飛んで、浜の方へ行くや、白痴の親は急に話を止めて、茫然と我をも忘れて見送って居ました。」

この一羽の鳥を六蔵の母親が何と見たでしよう。」

湯地孝氏は、先述した如く、「春の鳥」における、「この一羽の鳥……」の、結尾の一行を無用の「贅言」とした。それならば、「忘れ得ぬ人々」の、『秋山』ではなかった。」も、同じであると言わねばなるまい。しかし、「忘れ得ぬ人々」というタイトルに対応して、それが、「亀屋の主人」でなく、最終の一行の「秋山」であるという断言は、作品の効果を、百パーセントに發揮させた、磐石の重きに値する一行であった。

それと同様に、この「春の鳥」という題名の作品の終結を示す一行も、「春の鳥」=“The blessed Spring Bird”

に対応した、黄金の一行とってよかった。

ということは、結局、「春の鳥」という作品は、ワーズワース少年天使説に基づく、少年なるが故の救済小説、あるいは、白痴の運命悲劇というところに、その本質があるのではなく、神の恩寵による救済に値するが故の、白痴救済の形象化というところに、その主題があったということが、そこに凝縮されていたということになる、ということなのである。

注

(一)「童なりけり」(“There was a Boy”)の原詩と田部重治訳とを掲げておく。“There was a Boy”は、独歩の『自然の心』の中で、幼稚ながら、本文批判の行われた、原詩が収載されている。ただし、*Wordsworth Poetical works* (1974)に収録されている原文を転記した。

There was a Boy; ye knew him well, ye cliffs

And is land of Winander!—many a time,

At evening, when the earliest stars began

To move along the edges of the hills,

Rising or setting, would he stand alone,

Beneath the trees, or by the glimmering lake;

And there, with fingers interwoven, both hands

Pressed closely palm to palm and to his mouth

uplifted, he, as through an instrument,

Blew mimic hootings to the silent owls,

That they might answer him.—And they would shout

Across the watery vale, and shout again,

Responsible to his call, —with quivering peals,
And long halloos, and screams, and echoes loud

Redoubled and redoubld; concourse wild
 Of jocund din ! And, when there came a pause
 Of silence such as baffled his best skill;
 Then sometimes, in that silence, while he hung
 Listening, a gentle shock of mild surprise
 Has carried far into his heart the voice of mountain-torrents; or the visible scene
 Would enter unawares into his mind
 With all its solemn imagery, its rocks,
 Its woods, and that uncertain heaven received
 Into the bosom of the steady lake.
 This boy was taken from his mates, and died
 In childhood, ere he was full twelve years old.
 Pre-eminent in beauty is the vale
 Where he was born and bred; the chuechyard hangs
 upon a slope above the village-school;
 And through that churchyard when my was has led
 On summer—evenings, I believe that there
 A long half-hour together I have stood mute-looking at the grave in which he lies !

田部重治訳 一人の少年

一人の少年がいた。

ウィンナンダーの断岸と島々よ、

お前たちは彼をよく知っている。

幾度となく、黄昏れどき、

一番早い星々が山の端に見えつ隠れつ動きそめるころ、

樹の下に、あるは、うすひかる湖水のほとりに、少年はただひとり佇んでゐた。

彼は指と指とを組み合せ、

掌と掌とをしつかり合せ、

口につけては笛のように、

沈黙せる鼻が答えるために、

ホーホーと真似声を立てた。

すると鼻は湿っぽい谷を越えて叫び、

彼が呼べば鼻も、また、叫んだ。

ふるえる音、長い声、鋭い叫び、

そして声高き反響がくり返された。

陽気な騒ぎの狂える混乱！

やがて声がと切れて沈黙が来り、

少年の巧妙な誘引も無駄だった。

そして時々、その静けさの中に耳をすますと、

心を静かにゆする滝の音が、

思いがけなく優しく彼を驚かした。

或は、また、目に映ずる景色が、

その蔽そかなる姿や、蔽や、

森や、静かな湖水にうつる定かならぬ空と共に、

彼の心に不意に這入って来た。

この子供はまだ満十二歳にもならぬうちに、

友だちと別れ、若くして死んだ。

彼が生れて育ったところは、

殊のほか美しい谷だった。

墓地は村の学校の上の斜面にあって、

夏の夕暮などにその墓地の間を過ぎるとき、

私は少年の這入っている墓を見守って、

半時間ほどのあいだ黙って立ちつづけた。

(2) 全集第五卷所収

「一昨日、竹取物語を読み大いに感じ申し候抑も此物語は物語其れ自身としては幼稚なる者かは知らねども千年後の読者に取
りては実に少なからぬ感慨を起さしむる足る者と存候小生読みて終に近きかぐや姫愈々月界に帰へらるゝて小段其の哀別離苦の
人情と千古依然たる明月と美人の優しき面影と相融化して小生に現はるゝに至りては幾度か巻を捲うて泣き申候」

(3) 独歩が、ワーズワースの少年観にいかにも傾倒していたかは彼のワーズワースの注解書たる『自然の心』が示すところである。
その一例をあげておく。それは、この独歩編のワーズワース詩集(八篇)の第一にあげられている詩 *Intimations of Immortality*
from Recollections of Early Childhood のエビグラフと、独歩自身のこのワーズワース詩集 *The heart of nature* のエビグラフ
の詩句とが同一の、少年観によって飾られていることである。それは、*Poems Referring to the Period of Childhood* のなかの、
次の三行である。

The Child is father of the man;

And I could wish my days to be

Bound each to each by natural piety.

(4) 「けれども其後だん／＼おしげと六蔵の様子を見ると、如何にも氣の毒でたまりません。不具の中にもこれほど哀れなものはないと思ひました、啞、聾、盲などは不幸には相違ありません。言ふ能はざるもの、聞く能はざる者、見る能はざる者も、尚ほ思ふことは出来ます。思ふて感ずることは出来ます。白痴となると、心の啞、聾、盲ですから殆ど禽獸に類して居るのです。兎も角、人の形はして居るのですから全く感じがない訳でもないが普通の人と比べては十分の一にも及びません。又た不完全ながらも心の調子が調ふて居ればまだしもですが、更に歪になつて出来て居るのですから、様子が余程変です、泣くも笑ふも喜ぶも悲も皆普通の人から見ると調子が狂つて居るのだから猶ほ哀れです。」(第二章)

(独歩原文はすべて、学習研究社版『国木田独歩全集』によつた)

Summauy

A Study of Kunikida Doppo's *The Spring Bird*

Saburo Tsujihashi

when he was at Saeki, Oita prefecture, Doppo was an ardent admirer of Wordsworth. It is no surprise that *The Spring Bird* shows Wordsworthian influence even in its title. What best characterizes this work, however, lies in its expression of Doppo's own views though under the influence of Wordsworth. In other words, *The Spring Bird* should be regarded as a work that embodies a Christian concept, Encompassing yet going beyond a Wordsworthian innocence of a child. The crow that flies away at the end of the story symbolizes the salvation of the soul of the idiot boy by the grace of God. I believe that the theme of the work is to be found herein.